

2024年度

愛知の総合学習

(第19集)

目次

I 教育課程編成活動について.....	2
1 総合学習における「ゆたかな学び」	2
2 総合学習における教育課程編成	3
II 第74次教育研究愛知県集会の動向	5
III 実践報告（中学校における実践）	6
障がいのある人への支援について多角的・総合的に考え、 誰も置き去りにしない社会をつくっていこうと努力することのできる生徒の育成 ～中学校1年生 総合的な学習の時間 「障がいのある人を支える人ってどんな人？考えよう、自分たちにできるこれからの支援」 の実践を通して～	
豊橋・磯辺小 影山 雅彦	
IV 本年度のまとめと今後の課題	15

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会総合学習部会

2024年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

◎部長 ○副部長

名古屋			尾張			三河		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
及川泰平	名古屋	戸田小	近藤洸希	瀬戸	陶原小	岩田光憲	岡崎	豊富小
近藤 駿	名古屋	大森中	溜久美子	尾北	城東中	山崎航太	安城	明祥中

第71次～第73次教育研究全国集会リポート提出者

71次			72次			73次		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
◎大島俊介	海部	津島東小	——	——	——	○影山雅彦	豊橋	磯辺小

・第74次教育研究全国集会 リポート提出者 勝又基之（尾張旭・東中）

I 教育課程編成活動について

1 総合学習における「ゆたかな学び」

グローバル化の進展や、絶え間ない技術革新、地球温暖化による気候変動、新型コロナウイルス感染症など、現在の社会は数年前からは想像もできない姿となり、まさに「予測が困難な時代」へと突入している。そのような社会の変革期の中で、子どもたちに身につけさせていかななくてはならないこととして、教科書の内容を理解するだけではなく、それぞれの教科の学びを子どもたちが生きる実際の社会と結びつけながら、目の前にある課題を解決していく資質・能力の育成が求められている。

こうした背景のもと、本年度、愛教組連合は第74次教育研究活動の重点として、「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などのかかわりを大切にしたい創意あふれる教育課程編成活動をすすめる」の2点を掲げている。

「子どもたち一人ひとりの意欲を大切に」することや、「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかる」ことはこれまでも総合学習が中核として担ってきた学びの姿である。また、教科書の内容に留まらず、「人・自然・文化などのかかわり」を探究課題として扱う総合学習こそ、各教科の学びをつなぎ、子どもたちにとって真に「ゆたかな学び」を実現することに必要不可欠な領域であると考えられる。

そこで、そのような「ゆたかな学び」にむけて、総合学習として大切にしたい観点を以下のように考えた。

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」

総合学習は、予測が困難な時代において、持続可能な社会を実現するための資質や能力を育てることをねらいとしている。そのため、教科の枠にとらわれることなく、次のような資質・能力の育成に努めていくことが求められる。

- ・ 探究的な見方・考え方を身につける。
- ・ 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を身につける。
- ・ 問題解決や探究活動に主体的、創造的、協働的にとりくむ態度を養う。
- ・ 自己の生き方を考えることができるようにする。

○「生きてはたらく力」を育むために

総合学習では、「生きてはたらく力」を育むために、以下6点を重点として考える。

- ・ 教科を横断する総合的な学習となるようにする。
- ・ 体験的な学習を効果的に取り入れる。
- ・ 協働的な学習になるように配慮する。
- ・ 探究的な学習の過程に基づいた単元を構想する。
- ・ 他人事としてではなく自分事としてむき合うことのできる探究課題を設定する。
- ・ 地域や各校の特色などをふまえる。

以上のことに配慮しながら、創意工夫のあるカリキュラムを編成することが大切である。

2 総合学習における教育課程編成

本校では、総合的な学習の時間において、国際理解教育の理念をもとに単元計画を作成している。また、3年生から6年生までの4年間を通して、「自ら学ぶ力を育て、ひと・もの・ことに進んでかわり、よりよく生きようとする態度を育てる」を目標に掲げ、実践を進めている。

3年生から5年生では、地域理解、環境、人権という主題を設定している。一方、6年生では国際理解をテーマとし、これまでの学びをもとに、子ども自身が関心をもっている主題を選択し、個人またはグループで探究のサイクルに沿った学習を行っている。

過去に行った実践、4年生の「アップサイクル東っ子交響楽団」では、子どもたちがどのような環境問題に関心をもっているのかをつかんでから課題瀬亭を行うことで、1年間を通して子どもたちが主体的に学ぶことができた。

また、6年生の「津島市SDGs未来都市プロジェクト」では、自身が暮らす街の課題を解決させるために、学習を進めた。4月からは「知る・気付く（課題の設定）」、9月からは「気付く・考える（情報の収集および整理・分析）」、1月からは「考える・行動する（まとめ・表現）」のように、重点をおいて学習を進めた。

ここでは、以上2点の教育課程について紹介する。

4年生の実践「アップサイクル東っ子交響楽団」

4月～

知る・気付く

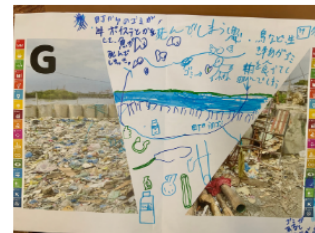
課題の設定

さまざまな環境問題が、自分たちの自分勝手な行動が起因であることに気付かせる。

フォトランゲージ

「この写真からわかることを考えよう」

- (1)写真の隠された部分がどうなっているか考えよう。
- (2)考えたことを発表しよう。
- (3)写真の全体図を見て、わかることを話し合おう。
 - ・この状況を放置した時の影響について（派生図）
 - ・この状況になってしまった原因について（因果関係図）
- (4)他の写真で話し合ったグループと意見交換をしよう
- (5)共通した原因がないかを考えよう。
- (6)自分が関心をもった写真を選び、考えを深めよう。
 - ・「ゴミ山で暮らす子どもたち」の写真に関心が集まったので、カリキュラムを再構築した。



6月～

気付く・考える

情報の収集

整理・分析

ゴミ問題と貧困の問題の係に気付く、貧困が生む未来について考えさせるとともに、自分にできることを考えさせる。

貧困による児童労働

「カカオ農家で働く少年」

- (1)この植物は何だろう？
- (2)カカオ豆の生産・出荷の流れを知ろう。
 - ・写真の並べ替え（フォトランゲージ）
- (3)児童労働の問題の影響を考えよう。
 - ・この状況を放置した時の影響について（派生図）
- (4)学校に行けないってどういうことだろう。
 - ・ネパール語を用いたシミュレーションゲーム。
- (5)貧困が生む未来を考えよう。



※自分たちの身の回りの課題に戻り、どんな課題を解決させたいのか問いかけた結果、ゴミ処理の話に関心が向いたため、カリキュラムを再構築した。

10月～

考える・行動する

まとめ・表現

自分たちの学びを保護者や地域に向けて発表することで、環境に配慮した生活を送っていくというとする心情を育む。

まとめ・表現

JICA中部の研修員に向けて、子どもたちが考えた環境に配慮した生活の送り方を発信することで、環境保全の心情を育む。

社会科のゴミ処理についての学習の発展学習

「廃材をつかったヒミツのすみか」を作ろう

- (1)家庭で出るゴミの量を調べよう。
- (2)作品作りに使えそうなものと考えよう。
- (3)ゴミの中ですみか作りに使えそうなものを収集しよう。
- (4)工作「ヒミツのすみか」をつくろう。
- (5)アップサイクルという考え方のよさを考えよう。



音楽科の合奏の学習と教科横断

「廃材をつかった楽器」を作ろう

- (1)みんなを楽しませることが出来るアップサイクル商品を作ろう。
- (2)廃材楽器で演奏している講師から、楽器の作り方を学ぼう。
- (3)楽器作りをしよう。
 - ・楽器の種類ごとのグループで作成し、よりよい音色になるよう試行錯誤を繰り返す。



たくさんの人に感動を届けよう

「アップサイクル東っ子交響楽団」

- (1)観客とともに楽しめる演奏会を計画しよう。
- (2)この1年間で学んできたことをもとに、台本作りをしよう。
- (3)演奏会に向けて練習しよう。
- (4)外国人研修員に向けて日本の文化を発信しよう。
- (5)観客とともに演奏会をしよう。
- (6)1年間の学びを振り返ろう。
 - ・アップサイクルについての振り返り
 - ・異文化交流についての振り返り
- (7)これからの自分の行動目標を立てよう。
 - ・「いま、5年後まで、10年後まで」のよう
 - うに、時間軸を設けて行動目標を立てる。



6年生の実践「津島市SDGs未来都市プロジェクト」

4月～

知る・気付く

課題の設定

地域が考える自分たちの街への期待の低さと、市政の街づくりの理想との差異を埋めるために、環境・人権・多文化共生について学んできたことを生かせることに気付かせる。

企画政策課の出前授業 「これからの街づくり 第5次総合計画について」



家族や地域への調査 「津島市はどんな街か」



- (1) 未来の津島市がどんな街になったらいいのか考えよう。
・ 事前に行った平和学習と、5年生で学習した多様性についての学びを振り返らせる。
- (2) 企画政策課に、聞いてみたいことを考えよう。
・ 津島市という身近な社会にまで限定して、どのような未来をめざしているのか、街づくりに関心をもたせる。
- (3) 出前授業「これからの街づくり 第5次総合計画」
- (4) 街づくりの魅力をまとめよう。

9月～

気付く・考える

情報の収集

整理・分析

探究課題を自身の関心により設定させ、環境・人権・多文化共生の3観点で分類し、市政に訴えるためにグループ探究を進めさせる。また、自分たちの学びを誰に届けるべきかを考えさせる。

3観点での探究学習 「私たちにできること」



街づくりへの提言書 「津島市SDGs未来都市プロジェクト」

- (1) 自分に関心をもっているテーマを選ぼう
- (2) テーマ別学習をしよう。
・ 環境「地域のポイ捨てごみを減らそう」
・ 人権「障がいがある方にとってやさしい学校って」
・ 多文化共生「世界から友だちを迎えたら」
- (3) 学んだことをまとめよう。
・ 街づくりに生かせそうなアイデアを書き出す。
- (1) 出前講座で紹介された3つの施設について考えよう。
・ 駅前天王通り ・ 天王川公園 ・ 未来の学校 ・ 地域の人にインタビューをさせる。
- (2) 小学生在が考える理想の街づくりを考えよう。
・ 1組駅前通り、2組公園、3組学校に割り当て、関心をもったテーマでグループをつくらせる。
・ 環境、人権、多文化共生の3つのテーマごとに話し合い活動を行い、「現状の課題、解決策、導入方法」について話し合わせる。
- (3) 仮のアイデアを講師にプレゼンしよう。
・ 3つのテーマについて外部講師に助言をもらい、自分たちのアイデアを社会のニーズに合ったアイデアになるように改善させる。
- (4) プレゼンテーションシートをつくろう。
・ 模造紙にアイデアをまとめ、自分たちの考えを発信するための準備を行わせる。



1月～

考える・行動する

まとめ・表現

自分たちの学びを地域や自治体に向けて発表することで、社会への所属感を育むとともに、市政への関心を深めさせる。

企画政策課、地域で活動するコミュニティへの発表会 「もっとステキな街に！！アイデア27」

- (1) ポスターセッションに向けて、台本をつくろう。
- (2) リハーサルを通して、発表方法をブラッシュアップしよう。
・ 相手に伝わる言語表現になっているかどうかを助言し合う。
- (3) 発表会で、自分たちの考えを発表しよう。
・ 企画政策課、外部講師、家族、地域で活動する団体に対して発表する。
・ 市長や教育長に発表し、アイデア27の提言書を届ける。
- (4) 未来の津島市がどんな街になったらいいのか考えよう。
・ 年度当初に考えた未来と、終末に考えた未来を対比させる。
- (5) 1年間の学びを振り返ろう。
・ 地域への貢献度、市政への関心度、自身の成長について振り返る。



令和6年度の実践「東っ子フェス2024」

総合学習で学んできたことを、参観してくれる家族や異学年に向けて、体験会「東っ子フェス2024」を開催する。

- 3年生：地域の防災・減災への取組について学び、防災グッズの作り方講座を開く。
- 4年生：ゴミ問題について学び、エコキャップデザインアートに参加者とともに完成させる。
- 5年生：地域の福祉事業所で学んだことをもとに、手話や点字などの体験教室を開く。
- 6年生：SDGs×スポーツをテーマに学んだことをもとに、インクルーシブなスポーツ体験会を開催する。

Ⅱ 第74次教育研究愛知県集会の動向

1 報告された内容について

一、全体の感想

身近な事象を探究課題として取り上げ、他者とかかわり合いながら、主体的に取り組む子どもの育成をめざした実践が多く報告された。

いずれの実践も、各地域の特性を生かした内容で単元構想となっており、子どもの興味・関心を引き出しつつ、子どもたちの思考に沿って実践をすすめていこうとする教員の熱意が感じられた。

二、討論の内容

(1) 総合学習を行う上で難しいと感じること

討論では、総合学習を行っていく上で日頃感じる課題や、その解決にむけた取り組みについて話し合われた。その中で、以下のような意見が出された。

- ・限られた時間数で子どもの思考に沿いながら授業を展開していくことが難しい。
- ・各学校で総合学習のカリキュラムが決まっており、毎年同じテーマでよいのか疑問である。

助言者からは、限られた時間で子どもの思考に沿う授業を行うには、教員がやりたいことや学ばせたいことを、子どもの関心に結びつける単元構想が重要であるとの助言を得た。また、毎年同じテーマであっても、子どもの現状に合わせて切り口を変えることで、その年の実態に合った新鮮な実践を実現できるという助言を得た。

(2) 効果的に地域教材を使用するために、どんなことを意識するか。

地域教材の価値を高め、子どもが主体的に探究できるようにするために、教員が意識すべき点について討論が行われた。以下の意見が出された。

- ・地域の困り感や課題がつまっている教材を見つけることが重要である。
- ・地域の人々との交流や活動を通じて、魅力的な教材を発掘できる。
- ・地域にむけてどのように発信するかを見据えて、計画的に実践する必要がある。

助言者からは、子どもに新しい気付きや疑問を与えてくれる人やものこそが魅力的な地域教材であり、教員は子どもが何に困り、何を解決したいと思っているかを的確に把握することが重要であるとの助言を得た。

(3) 総括討論

子どもの主体性を保ちつつ、持続可能な実践にするために必要な要素について話し合われた。

- ・教員が変わっても実践ができるよう、学校としての系統性をもたせる必要がある。
- ・地域の人や企業と協力し、教員と地域が一体となって授業をすすめることが重要。

助言者からは、実社会・実生活に深くかかわる活動が子どもの主体性を育むことにつながるとの助言を得た。また、時間的・物理的制約の中で子どもたちに何ができることを考えさせることが重要であり、こうした制約に抗わずに実践を続けることが持続可能な実践につながるとの助言を得た。

三、今後に残された課題

多くの学校で総合学習のカリキュラムが整備され、地域との連携も強化されており、持続可能な実践が行えるようになってきている。一方で、必ずしもそれが子どもの主体的な学びの保障につながっているわけではない。子どもの実態に合わせたカリキュラムの見直し方や地域との連携の仕方を今後も検討していく必要がある。

Ⅲ 実践報告（中学校における実践）

報告書の要点

SDGsの目標8「働きがいも経済成長も」の中には、「若い人たちや障害がある人たち、男性も女性も、働きがいのある人間らしい仕事をできるようにする」ことが、目標の一つとして明記されている。しかし、日本の障害者雇用率は目標までは届いておらず、実際に障がいのある人を雇用したり、一緒に働いたりしていくうえでは課題があるといえる。障がいのある人に対して身体的な援助をすることに加え、働く環境を整えたり、ともに働く仲間として認めたりしていくことが、これからの支援としてより大切になってくると思う。

本学級の生徒の多くは、障がいのある人に対して「たいへん」「可哀想」「不自由」といったイメージをもっていた。また、障がいのある人たちの支援の仕方に関しても、身体的な支援の仕方以外を思いつく生徒はいなかった。

そこで、「障がいのある人への支援の仕方について多角的・総合的に考え、誰も置き去りにしない社会をつくっていこうと努力することのできる生徒」の育成をめざし、「障がいのある人を支える人たちの仕事の様子や仕事に対する思いを実際に見たり聞いたりする機会を複数回もち、学んだことをもとに自分たちにできる支援について考え、発表すること」で、さまざまな支援の仕方や支援するときに大切なことに気づき、誰も置き去りにしない社会にむけて自ら考え、動き出すことができるだろう。」という仮説をたてた。

実践を通して、生徒は障がいのある人の支援の仕方には、間接的な支援や障がいに応じた支援があることを気づき、支援の仕方に関して多角的に考えることができるようになった。また、障がいのある人に自分から連絡をとり、質問をしてわかったことを発表したり、募金を企画して障がいのある人のためにお金を集めたりと、実際に行動に移す生徒も現れた。実践を通して、障がいのある人への支援の仕方について考える授業は、「福祉」というテーマだけで扱いきることは難しく、「雇用」や「職業」とも大きくかわる内容であると感じた。よって、障がいのある人を支える人を取り上げることは、1年生で学ぶ「福祉」だけでなく、2年生で学ぶ「職業」とも関連をもたせることが今後の課題であると思う。今回の実践と反省をもとに、今後も誰も置き去りにしない社会にむけて努力することのできる生徒を育てていきたい。

1 主題設定の理由

本学級の生徒の多くは、5年生、6年生の総合的な学習の時間において「福祉」について学習している。単元導入時に、小学校で学んだ福祉を振り返ったうえで、障がいのある人に対してどのようなイメージをもっているかタブレットに打ち込んだ。そして、出現数の多い単語を表示してみたところ、「たいへん」「可哀想」「不自由」といった単語がめだった【資料1】。このことから、多くの生徒が、障がいのある人に対してあまりポジティブではないイメージをもっていることがわかった。また、6

月に福祉体験教室を受けて、障がいのある人を助けたいという思いを多くの生徒がもつことができたが、身体的な支援の仕方以外を思いつく生徒はいなかった。これらのことから、障がいのある人に対して、一つの側面でしか見ることができていない生徒が多く、しかもポジティブな見方ができていない様子が見えてきた。これは、新型コロナウイルスの影響で小学校時での福祉施設への訪問活動や福祉教室がなくなり、障がいのある人と接する機会が減ってしまったことも少なからず影響しているだろう。

【資料1】 生徒たちの障がいのある人へのイメージ



国連総会で採択されたSDGsの目標8「働きがいも経済成長も」の中には、「若い人たちや障害がある人たち、男性も女性も、働きがいのある人間らしい仕事をできるようにする」ことが、目標の一つとして明記されている。日本でも、民間企業の法定雇用率は2021年3月に2.2%から2.3%に引き上げとなり、障がいのある人の雇用をすすめようという動きがある。しかし、2020年の障害者雇用率は2.15%で、目標までは届いておらず、実際に障がいのある人を雇用したり、一緒に働いたりしていくうえではまだ課題があると言える。これらのことをふまえると、障がいのある人が抱える不自由さを理解し、身体的な援助をすることはもちろん大切であるが、働く環境を整えたり、ともに働く仲間として認めたりしていくことが、これからの支援としてより大切になってくると思う。

以上のことから、障がいのある人にもさまざまな人たちがいることと、その支え方にもいろいろな方法があることを学ぶことで、障がいのある人に対する支援のあり方は一つではないことを気づかせていきたい。そして、学んだことをもとに自分たちにできる支援を考え、誰も置き去りにしない社会をつくっていくために努力する生徒になってほしいという願いをこめ、本主題を設定した。

2 研究の構想

(1) めざす生徒像

障がいのある人への支援の仕方について多角的・総合的に考え、誰も置き去りにしない社会をつくっていこうと努力することのできる生徒

(2) 研究の仮説とてだて

障がいのある人を支える人たちの仕事の様子や仕事に対する思いを実際に見たり聞いたりする機会を複数回もち、学んだことをもとに自分たちにできる支援について考え、発表することで、さまざまな支援の仕方や支援するときに大切なことに気づき、誰も置き去りにしない社会に向けて自ら考え、動き出すことができるだろう。

てだてⅠ 障がいのある人をさまざまな立場で支える人たちと出会い、支援のあり方についての話を聞く場の設定

市役所、ほっとぴあ、社会福祉協議会、企業の方をゲストティーチャーとして呼び、話を聞いたり、質問したりすることで、直接的な支援だけでなく、間接的な支援や障がいに応じた支援など、支援のあり方について多角的に考えることができるだろう。その際、仕事内容だけでなく、働いている方たちの思いも語ってもらい、子どもたちがより興味をもてるようにする。また、障がいのある人を積極的に雇用している地元企業K社の職場の様子を動画で撮影し、実際に支えている様子を見ることで、支援の仕方について理解を深めることができるようにする。

てだてⅡ 学びを振り返り、学んだことをもとに、自分たちにできる支援について考え、発表する場の設定

ゲストティーチャーから聞いたことを学級内で振り返り、感じたことや調べたことを伝え合うことで、支援の仕方や支える側の思いについて多角的に考えることができるようにする。そして、学んだことをもとに、自分たちにできる支援について考え、仲間と話し合った内容をゲストティーチャーの前で発表する場を設ける。発表を聞いたゲストティーチャーからアドバイスをもらうことで、時間的な視点や自分たちの特性、実現可能か否かなど、総合的に考えを深められるようにすることで、行動に移すことができるようにする。

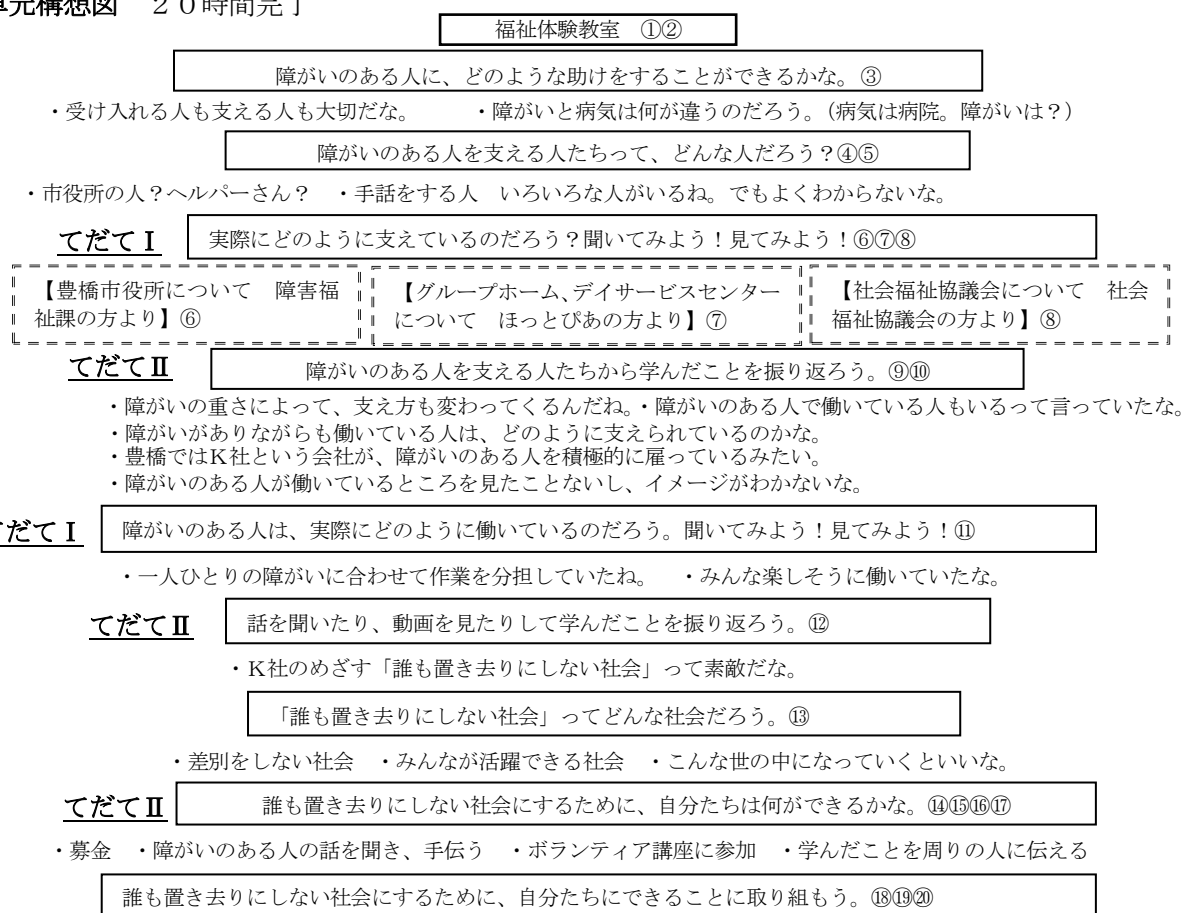
3 研究計画

(1) 研究対象 1年生34人（男子19人、女子15人）

(2) 仮説の検証方法

Aを抽出生徒とし、その変容を追うことで仮説の妥当性の検証を行う。Aは真剣に授業に参加することができ、自分の考えをまとめる力がある。福祉体験教室では、さまざまな体験を通して福祉の大切さを理解し、障がいのある人に出会ったら少しでも助けをしたいという思いをワークシートにまとめることができた。障がいのある人に対するイメージを尋ねたアンケートでは、「不便なことが多くてたいへんそう」と答えており、ポジティブな印象はもてていない様子だった。一方で、身体的な支援以外は思いつかず、具体的にすぐに取り組むことができるような内容までは考えることができなかった。また、自分の考えをワークシートにまとめることはできているが、考えたことを授業で発表したり、積極的に仲間に伝えたりする様子はあまり見られない。本単元を通し、さまざまな障がいのある人たちがいることを理解し、その支援の仕方もさまざまであることや、支援するときに大切なことに気づいてほしい。そして、考えたことを積極的に仲間に伝え、話し合うことを通して、自ら考え、行動に移すことができるようになってほしいと願う。

4 単元構想図 20時間完了



新入生(小学6年生)説明会での発表、ポスターの作成、1-1募金活動

5 研究の実践と考察

(1) 障がいのある人を支える人たちって、どんな人だろう。【第1～5時】

福祉実践教室を通して、世の中にはさまざまな障がいがあることを学んだ。そして、福祉実践教室で学んだ障がいをはじめ、世の中にあるさまざまな障がいに対して、どのような助けをすることができるかを話し合った。話し合いを通して、さまざまな障がいがあることや、障がいによって支援の仕方が異なることに、多くの生徒が気付くことができた。Aの振り返りには「福祉実践教室で学んだ障がいの他にも、いろいろな種類の障がいがあることを知りました。」と書かれており、そのことに気づいている様子がうかがえた【資料2】。また、Aは、

「障がいと病気は何が違うのだろう」という疑問も書いていた【資料2】。Aに話を聞くと、「病気のある人は病院、では障がいのある人はどこに行くのだろう？」と考えたということだった。他の生徒も、「受け入れる人も支える人も大切」といった発言をしており、生徒たちは支える人たちの存在について気付き、興味をもちはじめた。

【資料2】Aのワークシート（第3時）

福祉実践教室で学んだ障害の他にも、いろいろな種類の障害があることを知りました。1つ疑問に思ったことで、障害と病気は何が違うのだろうと思いました。

（2）障がいのある人を支える人たちって、どんな人だろう。実際にどのように支えているのだろう【第6～8時】てだてⅠ

次に、タブレットによる調べ学習を通して、障がいのある人を支える人たちについて調べた。多くの職業を調べることができ、障がいのある人を支える仕事は世の中にはたくさんあることに気付くことができた。しかし、普段の生徒たちの生活ではなかなか出会うことがない職業のためイメージがわきにくく、具体的な内容まではわからなかったことから、次時でさらに詳しく調べることとした。福祉にかかわるそれぞれの職業を分類すると、「市役所」「グループホーム・デイサービス」「社会福祉協議会」と大きく3つに分けることができた。さらにその内容について調べ学習をすすめると、専門的な用語が多く、具体的な内容の理解までにはいたらなかった。そこで、これらの疑問を解決するために、ゲストティーチャーに話を聞いたり質問をしたりする場を設定した。それぞれのゲストティーチャーは、仕事内容や仕事に対する思いについて話をしてくださった。Aは、ゲストティーチャーの話を熱心にメモを取りながら聞いていた。

最初に話をした市役所の方は、さまざまな障がいがあることや、障がいのある人を支える制度について話をしてくださった。Aは、「いろいろな種類の障がいがあるから、いちがいに「障がい者」でまとめたくないなと思いました。また、たくさんの制度があることがわかりました」といった内容をまとめ、さまざまな障がいの種類があり、それに応じていろいろな制度があることを学んだ【資料3】。

【資料3】Aのワークシート（第6時）

障害のある人について、それぞれの障害の内容がよく分かった。いろいろな種類の障害があるから、いちがいに「障害者」でまとめたくないなと思いました。また、たくさんの制度があることがわかりました。

2番目に話をしたほっとぴあの方は、グループホームやデイサービスの仕事内容や、障がいのある人やその家族の相談窓口として働いている話をしてくださった。Aは、「看護師さんやホームヘルパーの人など、いろいろな人が障がい者の人を助けていることがすごいと思いました」と振り返り、さまざまな人たちが障がいのある人をそれぞれの仕事を通して支えていることに気付くことができた【資料4】。また、「障がいの方が楽しむことができたり、安心して暮らせていてすてきだなと感じました。」と書いた。障がいのある人も自分たちと同じように楽しめたり喜べたりするような支援のあり方があることがわかり、困っていることを支えるという支援の仕方だけでなく、より楽しめたり喜ばせたりするような支援の仕方もあることに気付いた。

【資料4】Aのワークシート（第7時）

介護されている方がやはりすごいなとあらためて感じました。障害を持っている方のために、看護師さんやホームヘルパーの人など、いろいろな人が障害者の人を助けていることがすごいと思いました。さらに良いなと思ったのは、それで障害の方が楽しむことができたり、安心して暮らせていてすてきだなと感じました。1人にとにかく悪いところがあると、それが嫌だなと思いますが、それでも自分なりに楽しむことができて、というのは周りの人の援助もあり、本人も嬉しいな、と思っているからこそ成り立つものだと思うので、本当にすごいな、と思いました。

3番目に話をした社会福祉協議会の方の話では、Aは「障がいのある（人）を支える人たちの相談にのる」「ボランティアをやりたい人を集め

【資料5】Aのワークシート（第8時）

障がいのある人を支える人たちの相談にのる。日常生活自立支援事業。福祉サービスの利用手続援助や金銭管理等を行う。

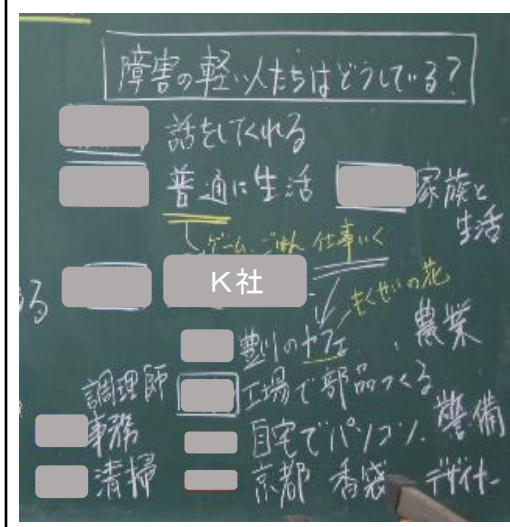
障害のある人の権利を守る
成年後見支援センター 障害のある人のかわりにボランティアをやりたい人を集める 決めてあげる

る」といった学んだことをまとめ、障がいのある人を支える人たちの相談にのったり、ボランティアを養成したりしている人たちの存在に気付くことができた【資料5】。

（3）障がいのある人を支える人たちから学んだことを振り返ろう。【第9時】てだてⅡ

生徒たちは、それぞれのゲストティーチャーから学んだことを振り返る中で、常に支援を必要とするわけではなく、障がいが比較的軽い人たちはどのように生活しているのだろうか、という疑問をもちはじめた。そこで、タブレットで調べてみたところ、「自宅にてパソコンでできる仕事をしている」「工場で働いている」「清掃をしている」といったことがわかり、障がいのある人でも働いている人たちがいることに気付くことができた。さらに調べていく中で、自分たちの暮らす豊橋市に、障がいのある人が多く働いているK社があることがわかった【資料6】。Aは、「障がいのある人も働いているなんて意外だし、すごいと思いました。どうやって働いているのか気になりました」と振り返っていた。学級での振り返りや調べ学習を通して、障がいのある人が働いていることはわかったが、どのように働いているのかまではイメージをもてない生徒が多かったため、実際にK社の方に話を聞くことにした。

【資料6】生徒たちが調べたことの板書



（4）障がいのある人はどのように支えられながら働いているのだろう。【第11時】

てだてⅠ

K社の方には、事前に職場の様子を撮影し、動画を通して障がいのある人が実際に働いている様子や、支えるときの工夫について話をいただいた。障がいのある人がチョコレートに

【資料7】Aのワークシート（第11時）

「どのように働いていた？カードに沿って活動をしていた。人それぞれできることを頑張っていた。分かることをやってかまわなかった。」

混ぜる食材をカットする際にカットする大きさを間違えないように、切るサイズを明記したカードを準備したり、一人ひとりの特性に応じて任せる仕事内容を変えたりといった工夫がなされている点を伝えてくださった。障がいのある人がいきいきと働いている様子や、支えている人たちの具体的な支援の内容がわかり、多くの生徒が意欲的に動画を見ていた。また、K社の企業理念や、障がいのある人と一緒に働く上で気をつけている点などについて話をしてくださった。Aの振り返りでは、「カードに沿って活動をしていた。人それぞれできることをがんばっていた。」といった振り返りがあり【資料7】、障がいのある人を支える人たちの工夫や、ちょっとした工夫や配慮で障がいのある人も活躍できることがあることに気付くことができた。

（5）障がいのある人が実際に働いている様子を見て、学んだことを振り返ろう。

【第12時】てだてⅡ

動画を見た後の授業の話し合いでは、K社のめざす「誰も置き去りにしない社会」に共感する声が多く、障がいのある人もない人も一緒に活躍する社会の重要性に多くの生徒が気付くことができた。話し合い後のAの振り返りには、「K社の目標が「誰も置き去りにしない社会」で、障がいのある人が働くことのできる場をつくり、一人ひとりが輝けるような社会を作ろうとしているのがすごいなあと思いました。また、かっこいいなあと感じました。」と、K社の理

【資料8】Aのワークシート（第12時）

K社の目標が「誰も置き去りにしない社会」で、障がいのある人が働くことのできる場をつくり、一人ひとりが輝けるような社会を作ろうとしているのがすごいなあと思いました。また、かっこいいなあと感じました。」

念に共感し、障がいのある人がいきいきと働く裏には、支えている人たちの工夫や思いがあることに気付くことができた様子がうかがえる【資料8】。そして、Aを含め、生徒たちはそのような社会にしていくなために自分たちは何ができるかを考え出した。

(6) 誰も置き去りにしない社会にするために、自分たちにできることを考えよう。

【第14時～17時】てでてⅡ

最初に個人で、誰も置き去りにしない社会にするために自分たちにできることを考えた際、Aは、「障がいのある人だけでなく、みんなと協力して、みんなと仲良くすることが大切だと思いました。募金活動やボランティア活動に参加して、積極的に行動したいです。」という考えをもった【資料9】。行動に移していきたいという思いをもつことはできたが、曖昧な内容が多く、具体性に欠ける部分があった。そこで、それぞれの考えをもとに、班ごとに自分たちができることを考えた【資料10】。班での話し合いを通して、Aが所属する2班では「すべての人が快適な生活を送ること。障がい者などの話を聞いたり、体験したりして、そこから受け取った意見を少しずつ実現していきたい。」という考えをまとめることができた【資料11】。Aは、話し合いを通して、自分たちには障がいのある人に対する知識や理解がまだ足りず、障がいのある人に話を聞いてから行動に移していくことが大切だという、新たな考えをもつことができた。Aに足りていなかった「障がいのある人の実態を知る」という視点を、班での話し合いを通してAがもつことができた様子がうかがえる。しかし、班の意見としてもまだ具体性に欠けるところがあり、行動に移すには難しく思われた。そこで、班ごとに考えた内容をゲストティーチャーの前で発表する場を設け【資料12】、アドバイスをもらうことにした。当日参加することができなかったゲストティーチャー（社会福祉協議会・K社）には、事前に生徒たちが考えた内容を見てもらい、感想やアドバイスを動画で伝えていただいた。当日参加することができたゲストティーチャー（ほっとぴあの方々と市役所の方）は、直接生徒たちに感想やアドバイスを伝えてくださった。ほっとぴあの方々からは、自分たちの特性をいかし、できることから取り組んでいくことの大切さを伝えていただいた。また、市役所の方からは、時間を意識して、考えた内容を行動に落とし込んでいくことの大切さを伝えていただいた。

それぞれのゲストティーチャーのA

【資料9】Aのタブレット端末への記述（第14時）

障害のある人だけでなく、みんなと協力して、みんなと仲良くすることが大切だと思いました。
募金活動やボランティア活動に参加して、積極的に行動したいです。

【資料10】班で話し合うA（第15時）



【資料11】2班の考えた内容（第15時）

2班

■できること

すべての人が快適な生活を送ること障害者などの話を聞いたり体験しそこから受け取った意見を少しずつ実現していきたい。

■理由

差別せず助け合うことができる社会にしたいと思ったから。

【資料12】ゲストティーチャーの前で発表するA



【資料13】授業記録（第16時）

C1：いつまでにやるかだね。

C2：うちらがおとなになるまで？それなら、障がいのある人を雇う会社を作るとか。

C3：成人してからだね。

生徒A：段階を追ってちょっとずつやっていったらどうだろう。

C4：今自分たちができることは、伝えることかな。うちらが体験したことをクラスのみんなに伝えることはできるかも。

生徒A：（おおきくうなずく）

C5：実際にうちらで障がいのある人のいるところに行つて話を聞き、他の人たちに伝えるのはどうだろう。

ドバイスを受けて、生徒たちは自分たちの特性をふまえ、時間的な視点をもとに再度内容を検討しはじめた。Aのいる2班では、最初は遠い未来の話になりそうだったが、Aの「段階を追ってちょっとずつやっていったらどうだろう」という発言から、「今自分たちができることは伝えることかな」といった発言につながり、未来ではなく今できる身近なこととして総合的に考えるようになった【資料 13】。その後のAの振り返りには、「本当に小さなことでもいいから考えたことを実行していこうと思いました。」という考えが書かれていた【資料 14】。そして、実際に行動に移していった。

Aは、同じ2班の生徒の知り合いをたどって障がいのある人を自ら探し出し、土日を使って話を聞いてきた。そこでは、障がいのある人が実際にどのようなことに困っているのか、周りの人たちにどのようなことに気をつけてほしいのかといった質問を自ら考え、取材をしていた。

【資料 15】は、Aがその時に用意した質問や聞いたことをまとめたメモである。その後、聞いてきた内容を2班の仲間と共有し、そこからまとめたことを学級で発表した。さらに、新入生説明会で小学校6年生に対して、ゲストティーチャーから学んだことや、実際に障がいのある人に話を聞いて感じたことなどを、Aが中心となり発表をすることができた【資料 16】。また、自分たちで募金活動を計画し、仲間と協力して作成したポスターを掲げながら豊橋駅で募金を呼びかけ【資料 17】、集めたお金を社会福祉協議会に寄付することができた。

6 研究の成果

(1) てだてⅠ 障がいのある人をさまざまな立場で支えている人たちと出会い、支援のあり方についての話を聞く場の設定について

【資料 18】は、ゲストティーチャーの話に対してAがまとめた記述内容と、そこに対する考察をまとめたものである。これをもとに、仮説とてだての検証をする。

豊橋市役所の方の話を受けて、Aは、障がいの種類はさまざまであることや、障がいのある人を間接的に支えるというやり方もあることに気付くことができた。さらに、ほっとぴあの方々や社会福祉協議会の方々の話を通して、支援の仕方はさまざまであることを学ぶことができた。また、障がいのある人の一人ひとりの個性や感情を大切にしながら支えていくことも大切であるということに気付くことができた。同様に、K社の方の話では、障がいのある人も一緒に働く仲間として認識し、支援してい

【資料 14】 Aのワークシート (第17時)

本当に小さなことでもいいから考えたことを実行していこうと思いました。そうした活動を起こすことで、

【資料 15】 Aの取材メモ (一部)

- 生活するうえで一番不便なことは何ですか？
 - 電話は出来ないですね
 - 車は乗りますか？
 - はい乗ります
- 私はちょうちょマークが付いてます。
ちょうちょマークは調べて見てね(下のマーク)
- 車に乗っている時救急車に気が付きませんか？
 - 後ろ方面から来るのは気づくのが遅れます。
- 周りの車で気が付きます。
- 急に話しかけられて困ったことはありますか？
 - 話しかけられた時は聞こえないと伝える様にしています。
- 家にお客さんが来た時どうしていますか？
 - 紙とペンをもって必要なことを書いてもらっています。

【資料 16】 新入生説明会で発表するA



【資料 17】 募金を呼びかけるA



【資料 18】 てだてⅠにかかわるAの記述

出会い	Aの記述	考察
豊橋市役所の方	いろいろな種類の障害があるから、いちがいに「障害者」でまとめたくないと思いました。 また、たくさんの制度があることが分かりました。	障がいのある人の中にも、様々な人たちがいること、その人々を支える多くの制度があることを学ぶことができた。
ほっとぴあの方々	・看護師さんやホームヘルパーの人など、いろいろな人が障害者の人を助けていることがすごいと思いました。 ・障害者の方が楽しむことができて、安心して暮らせていてすてきだなと感じました。	様々な人たちが障がいのある人々を支えていることに気づいたことがわかる。また、障がいのある人々を楽しませたり、喜ばせたりするような支援のあり方もあることに気づくことができた。
社会福祉協議会の方々	(社会福祉協議会の仕事は) 障害のある人々を支える人たちの相談にのる。ボランティアをやりたい人を集める。	障がい者支援を行う人々を、更に支えている人々がいることがわかった。
久遠テュコレートの方	カードに沿って活動をしていて。人それぞれできることを頑張っていた。分かることをやって活躍していた。	障がいのある人々を支える人々たちの工夫や配慮次第で、障がいのある人も活躍できることがわかった。

くことの大切さに気付くことができた。以上のことから、障がいのある人を支える人たちと出会い、支援のあり方を聞くことは、間接的な支援や障がいに応じた支援があることを気づき、支援の仕方に関して多角的に考えるうえで有効であったことがわかる。

(2) てだてⅡ 学びを振り返り、学んだことをもとに、自分たちにできる支援について考え、発表する場の設定について

【資料19】はゲストティーチャーから学んだことを学級内で振り返ったときのAがまとめた記述内容と、そこに対する考察をまとめたものである。

豊橋市役所、ほっとぴあ、社会福祉協議会の方々の話を聞いた後の振り返りを通して、Aは、障がいのある人を間接的に支えている人たちへの理解を深めたことに加え、比較的障がいが軽い人たちはどのように生活しているのか、という新たな疑問をもつことができた。また、K社の方の話を聞いた後の振り返りでは、K社のめざす「誰も置き去りにしない社会」に多くの生徒が共感し、Aも、障がいのある人が働き、輝けるような社会にしていこうことの大切さに気付くことができた。そして、障がいのある人が働く裏には、支えている人たちの工夫や思いがあることに気付くことができ、障がいのある人が働きやすい環境を整えることも大切な支援の一つであることを理解することができた。以上のことから、障がいのある人を支える人たちから学んだことを振り返る場を設定した今回のてだては、支援の仕方について多角的に考えるうえで有効であったことがわかる。

【資料20】は、学んだことをもとに、自分たちにできる支援について考えたときのAの記述や班での話し合いの内容と、そこに対する考察をまとめたものである。

当初、Aは、「障がいのある人だけでなく、みんなと協力してみんなと仲良くすることが大切だと思いました。募金活動やボランティア活動に参加して、積極的に行動したいです」という記述をし、行動に移していきたいという思いを高めていた。また、班での話し合いを通して、「障がいのある人の実態を知る」という新たな

【資料19】 学びを振り返ったときのAの記述		
	Aの記述	考察
第9・10時	障がいのある人も働いているなんて意外だし、すごいと思いました。どうやって働いているのか気になりました。	障がいのある人の中でも働いている人がいることに気づくことができた。
第12時	K社の目標が「誰も置きざりにしない社会」で、障がいのある人が働くことのできる場をつくり、一人一人が輝けるような社会を作ろうとしているのがすごいなあと思いました。また、カッコいいなあと感じました。	障がいのある人でも働いている人たちがいることと、その裏には支えている人たちの存在があることを理解することができた。さらに、K社のめざす理念に共感し、障がいのある人もない人も一緒に活躍する社会の重要性に気づくことができた。

【資料20】 自分たちにできる支援について考えたときのAや2班の記述	
Aの記述	考察
障がいのある人だけでなく、みんなと協力してみんなと仲良くすることが大切だと思いました。募金活動やボランティア活動に参加して、積極的に行動したいです	行動に移していきたいという思いをもつことができた。いつ・どのように活動に取り組むのかまでは考えられていない。
班での話し合い	
Aの所属する2班の内容	考察
すべての人が快適な生活を送ること。障がい者などの話を聞いたり、体験したりして、そこから受け取った意見を少しずつ実現していきたい。	話し合いを通して、Aは「障がいのある人の実態を知る」という新たな視点をもつことができた。障がいのある人にどのような話を聞くのか、聞いてどうするのかというところまでは具体的にない。
ゲストティーチャーからのアドバイス	
直後の2班の話し合いの様子	考察
Aの発言「段階を追ってちょっとずつやっていったらどうだろう。」 他の生徒の発言1「今自分たちができることは伝えることかな。」 他の生徒の発言2「実際にうちから障がいのある人のいるところに行って話を聞き、他の人たちに伝えるのはどうだろう」	Aは、計画的に段階を追ってやることの大切さに気づき、時間的な視点をもつことができた。班全体では、自分たちの特性を理解し、自分たちにできることを明確にすることができた。
行動の実践	
Aと2班の行動	考察
障がいのある人に実際に話を聞きに行った。耳の不自由な方から聞いた話をもとに、障がいのある人に対して自分たちが気をつけたいいけないことを学級全体に伝えた。	Aは、障がいのある人へ連絡をとったり、質問内容を自分で考えたりと、自らすすんで行動に移すことができた。

視点をもつことができた。しかし、Aの考えも班全体の考えも具体性に欠ける部分があり、実際に動き出すことはできなかった。しかし、自分たちが考えたことをゲストティーチャーの前で発表し、アドバイスをもらったことで、その後の話し合いでは、自分たちの特性をふまえ、時間的な視点をもった発言をする姿が見られた。自分たちにできるかどうか、時間は足りるかどうかといった、総合的な視点で支援を考えることができた様子がうかがえる。その後、Aは障がいのある人に自分から連絡をとり、質問をするなど、実際に行動に移すことができた。そして、そこから学んだことを学級の生徒に伝える姿が見られた。さらに、新入生説明会でこれから後輩になる小学校6年生に対して、ゲストティーチャーから学んだことや、実際に障がいのある人に話を聞いて感じたことなどを、Aが中心となって発表することができた。また、自分たちで募金活動を計画し、豊橋駅で募金を呼びかけ、集めたお金を社会福祉協議会に寄付することができた。以上のことから、学びを振り返り、学んだことをもとに、自分たちにできる支援について考え、発表する場を設定した今回のてだては、障がいのある人への支援について多角的・総合的に考え、自ら動き出すうえで有効であったといえる。

7 研究のまとめと今後の課題

単元終盤に、授業全体を振り返って学んだことについてまとめたAの振り返りには、「今は障がいのある人こそ一生懸命に明るく生きている気がします。プラスのイメージが大きいです。」と書かれており、障がいのある人に対して前向きなイメージをもつことができるようになった様子が見られた【資料21】。また、

【資料22】は同じく単元終盤に学級全体に対して行った障がいのある人へのイメージ結果である。本実践を通して、学級全体でも、障がいのある人に対してポジティブな見方ができる生徒が増えた。障がいのある人への支援について多角的・総合的に考えることを通して、単に「助ける」のではなく、「障がいのある方が、自分でできることを尊重しよう」とする様子がうかがうことができ、障がいのある人への見方が変わったことがわかる。Aをはじめ、本学級の生徒たちが、今回の授業で学んだことを生かし、これからも誰も置き去りにしない社会にむけて努力していくことを期待したい。

このような成果があった一方で、中学生としてできる支援は限られている部分があり、「将来、自分が起業して障がいのある人を積極的に雇うようにする」とか、「障がいのある人をもっと雇用してくれるように、豊橋市の企業に働きかけていきたい」といった内容を考える生徒もいたが、そのような意見を授業の中で実現したり、内容を深めたりすることは難しかった。障がいのある人への支援の仕方について考える授業は、「福祉」というテーマだけで扱いきることは難しく、「雇用」や「職業」とも大きくかかわる内容であると感じた。よって、障がいのある人を支える人を取り上げることは、1年生で学ぶ「福祉」だけでなく、2年生で学ぶ「職業」とも関連をもたせることが今後の課題であると感じた。今回の実践と反省をもとに、今後も誰も置き去りにしない社会にむけて努力することのできる生徒を育てていきたい。

【資料21】Aのワークシート

今は障がいのある人こそ一生懸命に明るく生きている気がします。プラスのイメージが大きいです。

【資料22】生徒たちの障がいのある人へのイメージ (20時)

すごい 個性 無縁 助ける
関係 わかる 働ける 普通 一つ
介護 心 思う 障害 いく プラス
部分 仕事 できる やる 様々
過ごす 強い 前向き 夢
少し 出来る 頑張る 持つ 体 人達
懸命 分かる 生きる
実行 明るい 身近 変わる
探す

IV 本年度のまとめと今後の課題

1 本年度の課題に対するまとめ

(1) 総合学習を中核とするカリキュラム・マネジメントのあり方の検討

実践研究からも、教育研究愛知県集会での報告内容からも、各学級において目の前の子どもたちの姿からカリキュラムを創造し、「ゆたかな学び」が展開されていることがわかる。学校や地域の特色を生かして年間を通した単元を構想したり、教科での学びを起点としてより深く探究したい事柄を見出して探究課題を設定したりするなど、総合学習の特色をふまえて各学校でカリキュラムが自主編成されている。しかしながら、担当する先生が変わると探究課題が大きく変わり、その年の学びが次の年の学びとつながりづらいことや、中学校においては学年体制ですすめていく必要性が高く、子どもの意識に基づいたカリキュラムが創造しづらいという課題も見えてきた。持続可能な学びを実現していくために、教科の内容と関連させたカリキュラムを作成して共有することや、学年や小・中学校を超えた継続的な実践とするための体制づくりなどについても、さらに検討していく必要がある。

(2) 総合学習を充実・発展させるための学校体制等の構築

学校や学年として、総合学習に関する引き継ぎ体制を強化することが求められる。学年ごとに予め題材が設定されている学校も多いだろう。ある学校では、4月に前年度の学年職員から、総合学習をどのようにすすめるとよいか、何がたいへんだったかなどの情報交換会を行っている。4月に1年の見通しを立てることで、学年職員が共通意識をもって単元を展開することができる。3月には、一年間の学習を振り返りながら、年間指導計画の修正を行うことで、よりよい年間計画をつくりあげている。このように、学校として年間指導計画を磨き上げ、引き継ぎを行っていくとよいだろう。

また、年間指導計画はあくまで計画である。子どもたちの考えに沿って、単元の展開を変化させる柔軟性が重要である。ある学校では、職員室の学年ホワイトボードに総合学習の単元計画を付箋で貼り、職員に見えるようにしている。子どもたちの考えを受けて、単元の展開を変化させる時には、新たな付箋を上から貼り直している。この学校では、調べたい事柄や聞きたい内容という情報収集の中身は変化するが、1年を通した大きな流れの変化はなかったとのことである。

ここに示したものは一例ではあるが、学年職員で共通理解をすすめる体制や学校全体で取り組もうとする仕組みづくりは今後も重要課題となるだろう。

2 今後に向けた課題

以上のことをふまえ、今後に向けた課題を以下の3点にまとめた。

- (1) 持続可能な実践とするための教員間の連携や学校体制のあり方
- (2) 探究的な学びを実現する手段としての ICT 機器や思考ツールなどの有効な活用のあり方
- (3) 今日的な諸問題の根本的要因に迫ることで、社会変革につながるような深い学びの実現に向けた授業展開の工夫

今後も「ゆたかな学び」の実現に向けた教育課程編成にむけ、研究を深めていきたい。